

シンポジウム

日本における心理学の学範形成：

東大・心理学実験室設立 100 年を迎えて¹

この原稿は、日本心理学会第 67 回大会シンポジウムの記録であり、参加者のみなさんには当日の発表に基づいた原稿を用意していただいたものである。なお、『心理学研究』第 75 巻 2 号の大会記録によれば、当日の参加者は 70 名であった（サトウタツヤ記）

日時：2003 年 9 月 13 日 10：00～12：00

場所：東京大学 法文 2 号館 1 番大教室

話題提供者 高砂 美樹 (東京国際大学)

肥田野 直 (東大名誉教授)

サトウタツヤ(立命館大学)

指定討論者 金森 修 (東京大学)

大山 正 (元東京大学・日本大学)

辻 敬一郎 (中京大学)

司会者 西川 泰夫 (放送大学)

企画者 サトウタツヤ (立命館大学)

佐藤 隆夫 (東京大学)

¹ このシンポジウム開催にあたっては、平成 13 年度～平成 15 年度 科学研究費・基盤研究(B)(1)・課題番号 13410022 (研究代表者・佐藤達哉「心理学実験室開室 (1903) 以後における本邦心理学の展開」) の援助を受けた。

西川 テーマは「日本心理学会第 68 回大会～日本における心理学の学範形成：東大・心理学実験室設立 100 年を迎えて」ということでございます。

企画はサトウタツヤさん(立命館大学)、佐藤隆夫さん(東京大学)でございます。司会は西川泰夫、話題提供者は高砂美樹さん(東京国際大学)、肥田野直さん(東大名誉教授)、サトウタツヤさん(立命館大学)。指定討論者として心理学者以外の立場から科学史や科学論に造詣の深い金森修さん(東京大学)をお願いしました。また、大山正さん(元東京大学・日本大学)、辻敬一郎さん(中央大学)、辻さんは現学会会長でございます。

当シンポジウムの位置づけを簡単に申しますと、まず心理学が制度化された背景からいうと、昨年 2002 年は、日本心理学会設立 75 周年を迎えたことをあげられます。それを記念して「日本心理学会 75 年史」が刊行されたことは記憶に新しいところです。そして、今年 2003 年、1903 年に当時の東京帝国大学に「精神物理学実験場」が開設されて 100 周年、さらに 1904 年には、同じく当時の東京帝国大学文科大学哲学科に心理学専修が設置され、さらに卒業論文規程が制定されて 100 年が経過します。こうした記念すべき時の経過と、その場所での標記のタイトルのシンポジウムです。また、いうまでもないのですが、それらを担った先達たちとして元良勇次郎、松本亦太郎がおられます。日本の心理学、新心理学の成立は、1888 年に、元良勇次郎が帝国大学講師に就任し、「精神物理学」を担当したことにあります。では、それ以前の心理学はどうであったか。なお、なぞの一つは、心理学という学名、その由来と語源は未解決の問題であることです。これは、もともと西周の訳出語ですが、psychology(性理学)と mental philosophy(精神哲学、すなわち心理学)との関係もきちんと議論されなければならないと思います。その点については恐縮ですが、私の論文を参考にしていただければと思います。こののはじまりは、西周が幕末の幕府派遣留学生としてオランダ留学をし、フィセリング教授による講義を受け、帰国後の明治 3 年当時、開設した私塾「育英舎」で行った講義(百学連環)にあります。幸い現在に残る講義ノートの中に、なぞを解くヒン



図 元良勇次郎

トがあります。この記録は、「大久保利謙編集西周全集第4巻」に収録されておりますが、総目次を見ると、そこには心理上学、物理上学の区別があります。これは、現在の人文・社会科学と自然科学の区分に該当します。その「心理上学」の中の細目として、「哲学」の中に、「性理学 (psychology)」とあります。西は、その後も一貫して性理学をサイコロジの訳語に当てています。この件を詳細に述べるのが趣旨ではありませんので、ここまでにしておきますが、もう一つ大事な点に触れておきたいと考えます。それは、こうした機会に、心理学史資料館 (アーカイブ) の必要性和設置の提言をさせていただきたいと思ひます。日本の学問の基盤を問う、今後の心理学 100 年、いな 1000 年 (ミレニアム) を見通してということですが、この提言の趣旨は、心理学の土台を作る貴重な史資料の収集・保管、維持・公開、から、さらには歴史的実験機器の収集と動態保存の必要性を強調したいと思ひます。そして最後に、「心理学史」の専門家の養成に欠かせない教育制度の確立と科目の設置などを訴えたいと思ひます。その上、この分野での学位取得から職場の確保などの制度的対応をめざしたいと思ひております。

ではこのシンポジウムの企画をされた東大の佐藤隆夫さんから一言お願いしたいと思ひます。

佐藤隆夫 今回のシンポジウムは日本心理学 100 周年ということですが、精神物理学実験室、心理学の実験室ができたのが 1903 年。東京大学で心理学の専攻分野で卒業論文を出せるようになる学生が誕生した 1904 年から 100 年目ということで企画したというわけです。皆さん、熱心にディスカッションして下さるようお願いいたします。

西川 それではシンポジウムを始めたいと思ひます。最初の話題提供として高砂さんからよろしくお願いいたします。

心理学における『実験室』とは

高砂美樹（東京国際大学）

高砂 「心理学における『実験室』とは」ということで、詳しいことは東大にゆかりのある肥田野先生にご紹介していただくとしたしまして、近年、生理学の中で発展を遂げたという前置きのなお話をさせていただきます。学問としてようやく整ってきた領域で、心理学の実験室とは何かということにテーマを絞って全般的な話をさせていただきます。

現在、東京国際大学にありまして、私のゼミの学部生はすべて心理学史を卒論のテーマに選ぶのですが、そういう大学でありながら、実験は必修ではないものですから、実験と言うと何をやっているかと言われるわけです。実験室の機材を買いたいと言うと、なんで心理学に実験がいるんだと思われたり

もします。私たちは実験室はあたりまえだと思っていますが、心理学における実験室の立場は他の人たちから見ると不思議なものではないかというところがあります。それで今回、100周年ということで、実験室ということで考えてみたいと思います。

歴史的なことからお話しますと、実験という言葉は明治以前からあったのではないかということです。多くの言葉が明治の初期、西洋文化の導入とともにつくられますが、心理学という言葉自体もそうですが、英和辞典の中ではかなり古くから出てきます。明治になっていない1862年に出版した『英和対

2003.9.13 日本心理学会第67回大会シンポジウム

日本における心理学の学範形成：
東大・心理学実験室設立100年を迎えて

心理学における「実験室」とは

高砂 美樹
(東京国際大学)

実験 / 実験室

- 翻訳にみる語彙の導入
 - 『英和对訳袖珍辞書』(1862)
 - Experiment 試み
 - Experimental 実験上の
 - Laboratory 舎密家の仕事場
- 明治初期に「実験」は「経験」と混用されたこともあったが、経験は哲学に、実験は自然科学にという使い分けが徐々に生じ、明治30年代以降に定着をみた

訳袖珍辞書』、ポケットブックの中で、experiment という言葉で実験という言葉がすでに入っています。実験という言葉は明治以前から使われていることはわかっています。ただし、この場合の実験はどういう意味か。経験とほとんど同じ意味で使われています。明治初期の実験という言葉は経験と混用されていたことがあり、経験は哲学に、実験は自然科学にという使い分けが徐々に生じたと言われています。このように違いがだんだんできてきたのが明治 30 年代、20 世紀初頭に定着を見てきたということでございます。実験室という言葉、laboratory という言葉が辞書にあります。舎蜜家、ドイツ語のケミカ、ケミスト、化学というイメージが一般に強くあったということがあります。実験室という形で言われるようになるのは 1900 年頃、辞書的には言われていても実際には心理学で実験所、実験室という言葉で、どんどん使われていたということが実際のお話です。

スライドは、心理学の教育機関設立年です。ドイツのシェーンブルクのテキストの一覧表から抜粋したのですが、ベルリンで心理学史をやっているシュプルング夫妻の研究論文からのものです。1879 年、ライプチヒにヴント、1883 年、ポルティモア、1886 年、カザン(ロシア)、コペンハーゲン、

開設年	所在地	代表者
1879	ライプツィヒ	W. Wundt
1883	ポルティモア	G. S. Hall
1886	カザン(ロシア)	Bechterew
	コペンハーゲン	C. G. Lange
1887	ペンシルヴァニア	J. M. Cattell
1888	ゲッティンゲン	G. E. Muller
	東京	元良勇次郎

Sprung & Sprung (1999)より抜粋

1887 年、ペンシルヴァニア、1888 年、ゲッティンゲン、東京に元良勇次郎が最初の教育機関をつくったとされています。これは早すぎるデータではないかと思うわけです。ご本人にこのデータはどこから来たのかと話をすると教育機関として laboratory も institute もゼミナールも入っている。元良さんが精神物理学を始めた時期が、彼らにとってはそれに相当すると見ているわけです。実験室とか研究室、institute を整理する必要があるかと思えます。メンバーを見てみますと、Wundt など心理学の研究機関を設立するにあたって、影響が強かったと考えられるものは生理学です。実験生理学が盛んになる時期ですが、そうは言っても 19 世紀のはじめは、まだ実験ということがそんなに定着しているわけではなく、ようやく 19 世紀

中盤くらいに実験生理学が花開く。

心理学における実験を考える時、3人の名前を挙げています。Johannes Müller、Claude Bernard、Carl Ludwig。この3人が心理学における実験について大きな影響を与えたと考えられます。Müllerは日本人にとっても馴染みがある生理学者を多く育てたという貢献があります。Bernardの『実験医学序説』が出て、その後、Wundtがベルリンで生理学を学びます。人体生理学ハンドブックをMüllerが出しています。Ludwigにはさまざまな実験機材がありますが、カイモグラフ(キモグラフィ)を考案して使えるようにした。この人の機材への影響が大きいと思います。そういう意味で生理学からの影響は否めないと思います。

心理学における実験：生理学からの影響

- Johannes Müller (1801-1858)
 - 『人体生理学ハンドブック』(1833-1840)
 - 弟子にHelmholtz, Brücke, Du Bois-Reymond
- Claude Bernard (1813-1878)
 - 『実験医学序説』(1855)
- Carl Ludwig (1816-1895)
 - Kymographion(kymograph)を考案

生理学の実験室を念頭においてドイツにおける実験室と研究室はどういうものか。私たちは教室、研究室という言葉をごちゃ混ぜにして使っていますが、向こうでもそう変わらない感じがします。19世紀初頭に実験室での学生を指導することをやりだしたのがゼミナールの最初だと言われていますが、実験室を伴うある種の機関がinstituteと呼ばれていて、正教授が少ないドイツにおいては、政府と交渉してつくりあげた実験室や

ドイツにおける「実験室」と「研究室」

- 19世紀初頭のLiebig以来、実験室での学生指導(Seminar)が普及
- 一般に「研究所」と訳されるInstitutとは、正教授が政府と交渉して作り上げた実験室や研究室などの施設の総称(ときに学科も意味する)
 - Wundtの実験室が拡張して完成した「実験心理学研究室」は、Leipzig大学にとって26番目のInstitut(1883/84)

研究室などの施設を総称してinstituteという名前を使います。場合によっては学科も意味する。何々研究室はinstituteと使っていたので研究所という大がかりなものとは限らない。施設だけでなく組織も総称している。こういうものができるということが、ある意味でWundtを介してできていくわけです。実際にWundtがラ

イプチヒ大学に実験室をつくるように頼んだのは1879年ですが、大学でinstitute に格上げされたのは1883年になってからだということです。これが実験心理学研究室です。大学では26番目のinstituteと呼ぶようになっていった。ただしWundtは公式名称として最初から研究所と呼んでおりました。

心理学における実験室の意義。ここには実験心理学の研究者の方が多くおられると思いますから、その意義はご存じだと思いますが、新しい学範(ディシプリン)の象徴としての実験室の意味。実験機器を使う部屋という意味だけではなく、そこで研究する、組織化や役割分担という社会的な役割が含まれているということ、よく考えるべきだと私は思います。

心理学における実験室の意義

- 新しい学範(ディシプリン)の象徴
 - 「実験機器を使う部屋」というだけでなく、そこで研究室の組織化や役割分担が生じる
- Experimentationの変容
 - Wundtの頃はまだ実験者 = 被験者
 - Würzburg学派との論争

Wundtの頃の実験は実験者と被験者はほとんどイコールで、交代しながらやっていたものが、ヴェルツブルク学派は実験者と被験者が分かれていくということで論争がありますが、そのあたりの実験についても、もう少し考えてもいいかなと思っていますが、今回はこのへんで終わりにして、次の具体的な話につなげたいと思います。

西川 それでは高砂さんのお話に関して、私の方から一つだけ。ライプチヒの研究所をインターネットで検索すると、1879年は、公式なinstituteではなく、私的なinstituteの開設年として出てきます。1883年に公式のinstituteになると記載されていますが、そのへんはどう考えられますか？

高砂 これはHistory of the Human Sciences誌の創刊号の最初に書いてあるのですが、年号は恣意的であると言っております。実験を授業の中でサイコロジカルセミナーの中で始めるのは79年~80年冬のセミナーです。それを私的か公的かというのは、どちらが早いかという意味のない競争の一環でしかないと思っています。

西川 それでは肥田野先生からお話を賜りたいと思います。よろしくお願ひします。

東大精神物理学実験室の設立と其の活動

肥田野直(東京大学名誉教授)

肥田野 東大で 1903(明治 36 年)に創設された実験室がどういう変遷を経て法文 2 号館の心理学実験室に移ったかというお話をしたいと思います。この場所は私が学生の頃、偉い先生が引退の時、最終講義をされる場所でした。私はこの場所で講義をしたことはありませんが、今日ここで話させていただくわけです。

東京大学の沿革:東京大学は東京開成学校と東京医学校が合併して 1877 年にできました。1886 年、帝国大学と改称し、学部は分科大学と称しました。1897 年に東京帝国大学、1919 年に分科大学を学部と変えまして、さらに、1947 年、東京大学と改称。1949 年に東京大学(新制大学)として発足。2004 年、国立大学法人東京大学として発足する予定であります。

最初の頃から数えますと、東大は 130 年の歴史を持っています。心理学科の歴史を『東大 100 年史』では 4 つの期に分けています。

第一期:1877~87 年。この頃は心理学の講義だけが行われていました。1888 年に哲学科の随意科目(選択科目)として精神物理学の講義が元良勇次郎講師によって行われました。その時、受講した 4 人の学生の記録によれば、最初にウェーバーなどの講義があった後は全て実験だったということです。1890 年、元良が教授に就任。1903 年、心理学・倫理学・論理学講座が設置され、その第一講座を元良が担当しました。1904 年、哲学科に心理学専修が設置されて、桑田芳蔵など最初の卒業生が 1905 年に出ております。そして、1912 年の元良教授の逝去で第一期は終了します。

第二期:1913 年京大に行っていた松本亦太郎が教授に就任。1917 年初めて独立した心理学講座が生まれます。1919 年、心理学科が独立し航空研究所の中に航空心理部が設置されました。

第三期:1926 年、松本は停年退官し、桑田芳蔵が教授に就任。1943 年、桑田が停年退官し、千輪浩・高木貞二が教授に就任します。

第四期:1946 年、航空研究所の廃止に伴い航空心理部は能率研究室に改組。1946~49 年の間は哲学科心理学専攻に改称されました。1949 年、心理学第二講座が設

置されました。1953年、大学院に人文科学研究科心理学専攻が設置されました。また、学部では第四類心理学専攻と称することになりました。

心理学実験室の歴史。1897年頃には法文科大学本館の2室が実験室と研究室に使われていましたが、騒音などの影響で不便であったということです。1886年6月に医科大学病理学教室として新築された木造家屋を取り壊して煉瓦建築とすることになり、不用になった木造家屋を改築して心理学実験室とすることになりました。こうして1903年3月独立した実験室が新設されました。当時この建物は精神物理学実験室と呼ばれました。ところが、その場所に安田講堂が新築されることになり、1922年に現在の第二食堂付近にその向きを90度回転して移転しました、翌年航空心理研究部が隣に新築されました。同年9月に関東大震災が起これり大学の大半は被害を受けましたが、実験室は無事でした。その後1935年現在の建物の中に移転してきました。

法文科大学本館の正面写真(発表時には提示したが本稿では省略)。この1階の東北隅に実験室がありました。煉瓦モルタル建ての瀟洒な建築でした、階段近くで騒がしい場所だったそうです。しかし学生がどんどん増えて、正面玄関から入ったところの1室も実験室に使われていました。

病理学教室の写真。医学部付属病院の位置にあった1886～1903年頃の写真です(発表時には提示したが本稿では省略)。

精神物理学実験室改築に関する書類。当時の建築は文部省の直轄工事でしたから、文部省建築課長と会計課長から山川東大総長に引き渡すという書類です。精神物理学実験室は126坪、改築費4,773円、同特別実験室は20坪、改築費505円と書かれています。しかし、特別実験室が何を意味するかは不明です。この受取状は総長の名前で出されています。文科大学長(学部長)のサインもありますが、松本はこの書類の存在を知らなかったのではないのでしょうか。彼の論文には特別実験室に関する記述がありません。

東京帝國大學總長理學博士山川健次郎殿

東京帝國大學文部科學精神物理學實驗室改築

記

內譯

名	種	種類棟數	坪數	起工年月日	保存年限	改築費
精神物理學實驗室特別實驗室	木造	一	二〇〇〇坪	三十一年六月六日	八年	五〇五八五
精神物理學實驗室	平家建	一	一一三六〇〇坪	同前十月十日	八年	四七三五六
計				三十二年一月一日		五二七九四三
				同前三月五日		

卷第一九號

明治三十九年七月廿八日

図 精神物理学實驗室改築關係書類 1 (東京大学史史料室提供)

建類
波第二三一號

貴學文科大學精神物理学實驗室改築工
事落成三付左記、通及待引渡候條領收書
御回付相成度候也

明治三十六年四月二十三日

文部省總務局建築課長

文部技師久留正道

文部省總務局會計課長

文部書記官福原繁三郎

文部省總務局建築課長
文部省技師久留正道
文部省總務局會計課長
文部省書記官福原繁三郎

二八

図 精神物理学實驗室改築關係書類 2 (東京大学史史料室提供)

精神物理学実験室の平面図。この図面は東大の施設部に保管されていて、それを大学院工学研究科建築学教室の岸田省吾先生が集めてコピーしてくださいました。なお、松本は詳しく説明した論文を残していますが、図面は一つも残されていません。その論文を参考にしながらこの図面をみますと、講義室はかなり広いですが、掛け図とか幻灯を投影するスクリーンが備えられていました。国費留学生時代の松本の報告書が残されていますが、視聴覚教室が重要であると強調しています。他の研究室と電線で結んでその実験の状況を教室でデモンストレートするようになっていました。

視覚実験室にはヘリオスタットが設置されていました。これは松本がライブチヒのWundtのところでも勉強した時、助手の被験者になっていた装置です。暗室の中に太陽光を取り入れてプリズムで分析するものです。

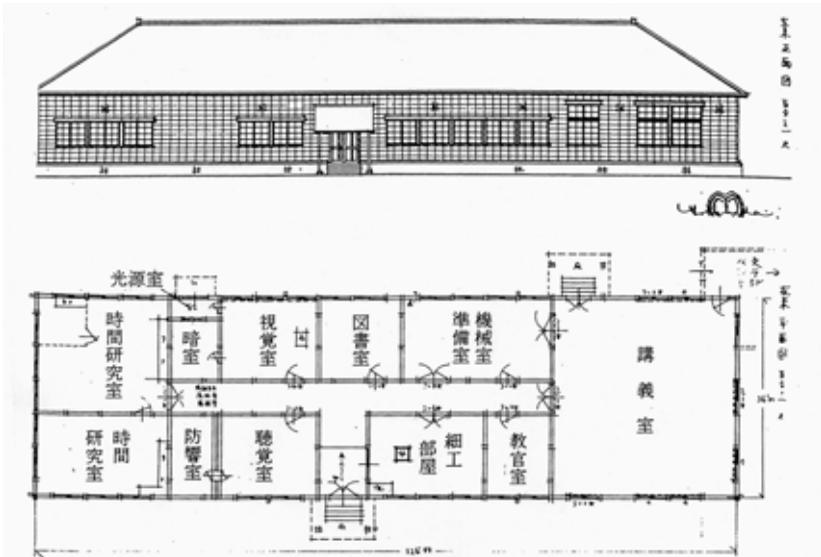


図9 精神物理学実験室 正面図及び平面図（東京大学施設部企画課提供）

東京帝国大学に精神物理学実験室（心理学実験場）設立（1903）
 （肥田野，心理学評論，1988）

時間研究室。最初は広い1室でしたが、大正時代にこの図のように2室に分けられました。時間測定による実験装置が置かれていました。振動を嫌う精密機械のために地面にコンクリートを打ってタタキとしました。この部屋は後に動作研究室と呼ばれました。

聴覚実験室。木の壁が二重になっていてその間に乾燥したおがくずを詰めて外部の雑音を吸収する防響室になっていました。ライブチヒでは防音室と呼ばれていました。

工作室。当時細工室と呼ばれていました。工作機械がおかれ、実験器械の補修・製作にあたりました。日本のように欧米から遠い国では自前で補修するための工作室が必要であることを松本は強調しています。

以上主要部分を説明しましたが、独自の工夫が見られる点をあげてみますと、地面にコンクリートを打って煉瓦を床の高さまで積み上げその上に御影石を置いて精密機械を置く場所とした。これは木造家屋では床の振動が大きいので欧米の石造建築に近い条件を作り出す工夫です。また、電源として電池を大量に使用しています。当時の東大は工学部の自家発電に頼っていましたが不安定でした。そこで、電池室を設けてそこから安定した電流を供給する計画をたてましたが、スペースの制約があり実現できませんでした。松本は自分の設計で京大に実験室を新築した時その計画を実現させました。我々の先輩が苦勞してヨーロッパの実験室に近いものにしようとしたことが窺われます。

1907年の東大の図面(発表時には提示したが本稿では省略)。現在安田講堂のあるスローブに精神物理学実験室と書かれた建物が見えます。

航空心理部の写真(発表時には提示したが本稿では省略)。1923年に新築された木造平屋建てです。1925年の卒業記念写真。移転後の実験室の北側で撮影された写真です。松本亦太郎、桑田芳蔵、千輪浩などのほか男女の用務員が写っています。昭和の初め頃工作室に男性専任技術者がいたようです。船大工上がりで器用な人だったということです。

法文2号館平面図(発表時には提示したが本稿では省略)。1935年に移転した心理

学実験室は現状と多少かわっています。この図は私が学生のときと同じですが、1階には図書室、事務室、教授室、航空心理学研究室、また地階には工作室、防響室、4階の屋上には動物実験室がありました。

なお、旧実験室は移転1年後に解体され、その使命を終えました。

西川 引き続き、サトウさんからお話をいただきます。

日本の心理学、学範形成期としての1903-1905

サトウタツヤ（立命館大学）

サトウ この発表では、まず1902年までのことをお話したうえで、1903年に起きた出来事について考えてみたいと思います。また、その後におきた福来友吉による透視・念写学説の提唱とその顛末について見ることで日本における心理学の学範成立について考えてみます。

1902年までのこと(1)

1875 (明治8年)	(西周訳)「心理学」文部省刊心理学という名称の書の始め
1877 (明治10年)	東京大学で「心理学」が教えられる(担当は外山正一)
1879 (明治12年)	師範学校(教師養成校)で「心理学」が教えられる。
1888 (明治21年)	帝国大学文科大学で精神物理学講義が行なわれる(元良勇次郎)

まず、これまでの今までの論点になかったことでは1897年、師範学校(教師養成校)で心理学が教えられるようになったことを指摘しておきたいと思います。これは現在の筑波大学の前身で、いわば教育心理学的な心理学が既に明治の初期に教えられていたわけです。

この後、今までも話に出てきた元良が1888年に講師となり、さら

1902年までのこと(2)

1890 (明治23年)	元良が帝国大学教授に就任。自立した心理学者の誕生。
1893 (明治26年)	帝国大学文科大学に「心理学・倫理学・論理学」講座ができる
1900 (明治33年)	松本亦太郎が高等師範学校・女子高等師範学校教授に就任。
1901 (明治34年)	塚原政次が「児童心理学」のため国費留学を開始。

に 1890 年に教授に就任します。研究も教育もできるという意味で自立した心理学者の誕生です。1893 年、帝国大学文科大学に心理学・倫理学、論理学講座ができます。1900 年、松本亦太郎が高等師範学校・女子高等師範学校教授に就任。実質的な意味で心理学担当の教授の二人目が誕生したと言えます。さらに 1901 年、塚原政次が児童心理学の勉強のために最初の国費留学をします。出発時から国費での留学は塚原が最初で、広島高等師範学校の教授になる前訓練として留学したわけです。当時は心理学と教育心理学が混ざりながら 1902 年まで進んでいったことを指摘しておきたいと思います。

では、1903 年の意味は何か。日本の心理学における学範（ディシプリン）形成を見た場合に 1903～1905 年が一つのメルクマールになるのではないのでしょうか。従来は 1903 年、つまり実験室設立、ということのみが注目されていましたが、もう少し目を広げる方がいいとこのごろ考えるようになってきました。

1903～5年のこと

- 1903 精神物理学実験室の設立
- 1904 東京帝大に心理学専修が成立
- 1905 心理学専修、初の卒業生を輩出
- 1905 元良勇次郎が国際心理学会で発表

1903 年、精神物理学実験室ができたこと。1904 年、東京帝大に心理学専修が成立したこと。1905 年、心理学専修・初の卒業生を輩出したこと。同じ 1905 年、元良勇次郎が国際心理学会で発表。国際舞台で心理学者が自分の研究を発表したということで、この時期は大きな意味を持っていると思います。また、このスライドにはありませんが、1906 年には京都帝大に心理学講座ができて（松本亦太郎が教授に就任）さらに広がりができることとなります。さらに詳しく見ていきます。

1903 年の精神物理学実験室の意味は何だったのでしょうか。Capshaw（1992）は心理学実験室の意味として、研究する場所の確保（刺激遮蔽や資料・機器保存）と心理学者たちの士気の高揚の二つをあげています。なぜ独立の実験室なのか。実際的な要求もありました。当時は感覚や知覚の研究が盛んでしたから実験をする時、振動や騒音を最小限に抑える必要があったのです。そのために独立の場所が必要だったと言えます。こうした条件の整備があって初めて繊細な実験ができるようにな

ったのです。戦前の日本では他にもいくつか建てられました。京城や台湾にも建てられました。そうなった時、実験室は一つのサイトとして機能するようになったのです。そこに機材等が置かれ実験するのも大事ですがそれだけでなく、学生たちにとっては居場所が確保されたということ

1903 精神物理学実験室

- Capshew (1992)による心理学実験室の意味
- 研究する場所の確保(刺激遮蔽や資料・機器保存)
- 心理学者たちの士気の高揚

ことで自分たちの城になったのだと思います。そして自分たちは心理学をやっているという士気が高揚したと思います。しかも 1904 年には心理学専修生として、哲学ではなく、心理学を勉強するという制度ができるわけですから嫌が上にも士気が高まったのではないのでしょうか。肥田野先生はハード面の実験室としての意味を言われましたが、私はその文化的な意味を言いたいと思います。

1904 年、心理学専修成立の意味は何だったのでしょうか。受験学科としての心理学専修、受験とは卒論試験受験の意味ですが、自分たちは哲学の学生ではなく、心理学の学生として学び、卒業論文を提出することが可能になったのです。これは心理学史の研究をする上でも重要で、この年以降は、誰が卒業生で、どういうテーマを研究したか、誰が心理学から離れていったのか、ということも分析できるようになるからです。

第一期の卒業論文はどういうものだったか。「人類の本能」「意志論」「面相及身振の研究」「美的感情」「空間知覚」「感情の研究」「不明1」と、こんなタイトルの卒論です。この中で残っているのは「意志論」のみですが、初期のものとして、「男女精神状態の差異」などがあります。この卒論は完全に和綴りでできています。なお「男女精神状態の差異」は実証的なデータを出していますが「意志論」は哲学的心理学であってデータはありません。意志とは何かの考察です。「男女精神状態の差異」では精神物理学の実験をやっています。男女差を見て、それほど変わらないと言っています。「幾何学的視学上の錯誤図」という中村隆治さんの論文も残っています。今から94年前の研究です。卒論が残っていたのはなぜか、と問えば、独立家屋があったからこそ残されていたという面も大きいと思います。ちなみに現在、私が代

表になっている科研費において東大の佐藤隆夫教授が資料保存のための実践として保存箱を購入して整理・保存に取り組んでくれています。東大の現存卒論は文化史的な意味も大きいのではないのでしょうか。たとえば大学ノートに卒論が書かれていて、現在だと安っぽく見えたりする。しかし当時の視点からすると大違いで、当時、大学ノートはステイタスシンボルです。大学生は限られた人数しかいませんでしたから、大学ノートを使えるということ自体がステイタスを表していたのです。ただし、保存状態という観点からすると和紙に和綴じ、という伝統的なスタイルの保存力はたいへん良かったです。

では、心理学を勉強して卒業した人たちはどのような進路をとったかということを見てみたいと思います。大学教授職従事者 14.3%（2名、桑田、野上）高等教育従事者 21.4%（3名、関、倉橋、守谷）教育関係官僚 14.3%（2名、風見、阿部）中等教育従事者 35.7%（5名、福島、古賀、松本、奥山、長尾）僧侶 14.3%（2名、大槻、笹本）となりました。寺の出身者など宗教の方が心理学を専攻することが多かったようで、大槻や笹本は実家の職業を継いだというような位置づけになっています。いわゆる研究者は0でした。明治期には心理学を生かす研究職はなかったということです。1・2期生に限って見てみました。

1905年には、元良が第5回国際心理学会で発表しました。この会の分科会は4つ。第一科は「実験心理学」、第二科は「内観心理学」、第三科は「病的心理学」、第四科は「犯罪・教育・社会心理学」で、元良が発表したのは第2科の内観心理学です。東洋哲学の中の自我の観念、参禅体験をもとに「直接経験」について検討。表象を介しない体験について発表し、リポーなどフランスの心理学者には好評だったようでした。

1906年以降について簡単に見てみますと、まず先ほども述べたように1906年に京都帝大に心理学専攻が設置され松本が教授になります。1909年、心理学通俗講話会。この講話会は心理学専修の産物と呼べるもので、心理学を学んで卒業した人たちが自分たちの学問を世間にアピールするという意味合いもありました。毎回少なくとも100人以上の一般の人たちが心理学の講演を聴きにきたということです。この講話会を受けて、1912年には『心理研究』という雑誌が誕生して、さらに心理学情報の発信がなされるようになりました。

ここまで、日本心理学展開の順調な面を見てきましたが、1912年、初代教授元良が病没すると、変動が起きます。元良の後任には京都帝大教授・松本亦太郎が就任しましたが、ほぼ同時期に東京帝大助教授として着任していた福来友吉が『透視と念写』を発刊し、休職に追い込まれます。福

来は元良の教え子で松本の弟弟子で、催眠療法や異常心理学をやっていました。博士号取得後、1905年から東京帝大助教授となります。当時東京帝大教授は元良勇次郎（心理学）福来友吉（臨床心理学）の二人の心理学担当者がいたこととなります。しかし、その福来は透視ができる人がいることを発見した（と主張した）わけです。

透視を揶揄的に言うのは良くないのですが、あるものを包んで後ろ向きになって中身を透視する、というのは複雑すぎます。単純な透視ではなく、すごく凝ったものを行った。もし透視の能力があるなら、もっと単純にやってもらえば良いのです。アタマの後ろでジャンケンしてゲーかチョキかパーかを当てるとか、その程度でいいのです。また、念写も同様で、もしそうした能力があるなら単純にやってほしい。ところが、それはできなかったのが当時の学者たちは否定論に傾いたわけです。念写について、ある人が「ダンボールを切り抜いた後を仕込んで写した写真のように見える、仕組んだのではないか」と言ったら、「念写がダンボールに切ったような形にできるのだ」という反論があった。真実か、うそか、今でも語ることはできませんが、ちょっと無理があるように思います。学者の判断も否定に傾いたので福来の



図 心理学通俗講話会の様子



図 福来友吉

活動も下火になっていった。

ところが、福来は元良の死後に本を出して、その序文に「義理の上で絶対背けない人から『本を出さない方がいい』と言われたので今まで出せなかった」と書いてしまった。「義理の上で絶対背けない人」とはもちろん元良のことで、その元良が亡くなったからといって自説を主張する本を発刊して物議をかもしたわけです。もちろん、学説の正否で休職になるとしたら問題でもあるのですが、現実としてはほぼそんな感じになっていて、さらに2年後に福来は退職することになってしまった。ちなみに後任はすぐに埋まらず、後に桑田芳蔵が講師となり、ヴントのもとに留学して民族心理学を学んで後に主任教授となりました。元良死後、福来休職後の心理学について、松本は「正常の方法による正常の研究」を奨励することになったと後に述懐しています。福来の休職は結果的に臨床領域の発展を大きく阻害したと思われる。

一般に、ある学範(ディシプリン)の形成過程は「知識として伝わる」「研究が開始される」「本拠地ができる」「学生が育つ」「知的流通ツールとしての学術誌」というような感じになっていきます。従って、明治期の半ばくらいの日本に実験室や専修ができたということは大きな意味を持っていたと思います。

ところが、日本心理学・学範形成の影の部分も同時に見えてきます。たとえば、他の学問と比較して公的取り組みは遅かったと言えます。1901年まで公的な留学がなかったということは明らかに遅い。それも教師教育、師範養成の方が多い。また心理学や心理学者独自のサークルは認知期に入るまで形成されなかった(医学・教育・保育などとの連携)こともあります。

また、前述のように、唯一の臨床心理学者の脱線が大きな影響を与えたということがあります。元良・松本・福来と3人しかいない時期のうちの一人ということは心理学者としてみても3分の1の重みがあったわけですから、心理学全体の発展にとっても非常に大きな影響を及ぼしたはずで、日本の臨床心理学が必ずしも順調に発展してきたわけではない理由の一端はここにあったのではないかと考えています。

さて、福来問題で揺れた心理学界でしたが、大正期の15年間は、東京帝大と京都帝大にしか心理学を専門に学ぶ場がなく、そうした意味で安定してはいたけれど

あまり伸びなかった時代だと言うこともできます。その後、昭和の声を聞く頃になって、東北帝大や九州帝大など、各地で実験室ができ、私学でも日大、関西学院大などに心理学専攻ができたことによって心理学者が増えていき、ついには日本心理学会の設立に至るということになります。

最後に、心理学史の重要性について話すと、有名・無名の人にとっての心理学の意味を問い続けていきたいと思っています。先程いくつかの卒業論文を紹介しましたが、それを書いた方については誰も知らないと思います。しかし、一人一人の人生が心理学と交差したことはあったわけです。それが残っていることの意味を大事にしたいと思います。また、その意味で史資料を保存することが重要だということ、これは西川先生の永年のご主張ですけれども、そうしたことを私も強調したいと思っています。私自身、『通史 日本の心理学』『日本における心理学の受容と展開』と日本心理学史の歴史の本を書きましたが、それを破壊するような心理学史の展開があってほしいと思っておりますし、それは史資料の保存・整理と活用からのみ生まれてくると考えています。

西川 各先生方から話題提供をいただきました。3人の方の話を受けて、指定討論のお話をいただきたいと思います。最初に金森先生から。先生は、科学哲学、科学思想史、生命倫理などのご専門で、『科学論の現在』など多数のご著書をお持ちであります。指定討論のご発言をお願いいたします。

金森 実証主義からの若干の乖離。アンリ・ベルグソンから話を始めようと思ったんですが、19世紀の実証主義がなぜ出てきたか。実証主義が心理学の学問の背景にあるのではないかということで、実証主義、ポジティビズムの視点から。実証主義的な考え方は、それまでにすでにニュートンとか科学者によって練られていたと考えていいのですが、言葉そのものは新しく、オーギュスト・コントというフランス人が1830年代に頑張ってつくりだしたものです。その背景はフランスの王政復古期、フランス大革命とナポレオン戦争後、散々破壊された後に肯定的なものをつくるという社会的な意識が出てきた。その中から出てくる発想の一つなのだと思います。実証主義というと科学的な概念と言われますが、基本的にはそうですが、王政

復古期の反動思想家のド・メストルが言った「人間の連帯を考えないと社会の安定性はない」という意味から生まれてきたものだと思います。1830～40年にかけてコントが実証主義に基づく社会構造を主張した、ほぼ同じ時期にドイツはどうであったか。その頃のドイツにはシェリングに代表されるような自然哲学が出てきました。つまり、フランスとドイツとは、お互いに全く違う傾向をやっていたわけで、互いに言及しあわない、無視しあうことになります。コント自身は晩年、宗教的になっていきますが、フランスの実証主義はその後のベルナールらの影響力が大きいと言われていいます。

実証主義の特徴の一つは、最終的な認識の目標と、最初の起源を問わない。始めと終わりを問わない。何かを調べていく時、最終的に何のために役立つかを問わないことが実証主義の重要な考え方です。最終的に何のために役立つかわからないがということです。

ドイツの場合、自然哲学がどうなったか。19世紀半ばの化学の実験と同時に農業科学などを行った人でリービッヒという人がいますが、そのリービッヒのものを読んでみると、リービッヒはドイツのシェリングとか自然哲学的なものを口汚く罵っています。その流れの中で注意しないといけないのは、リービッヒを実証主義の流れと考えていいのですが、それとほぼ同じ時期に唯物論の考え方が出でくるということです。フォイエルバッハなどが比較的初期ですけれど、フェヒナーなどが19世紀半ば、唯物論的な中で仕事を続けていくわけです。その文脈で精神物理学も出てくるわけです。フェヒナーが『精神物理学要覧』の本を書くのは1860年です。

フランスの場合はどうか。実証主義は1860年代にはすでに人口に膾炙するようになります。唯物論と実証主義は本来は違うものですが、大衆レベルでは、やがてそれらが混同されるようになります。ビュヒナーの本がフランス語に翻訳され大いに読まれます。唯物論的な世界観と、フランスの実証主義が完全に混同されるようになります。両者とも反宗教的な思想だったので、反宗教的であるということと理解されていきます。

ベルグソンは1859～1941年まで生きていた人ですが、『意識に直接与えられたものについての試論』を書きます。『時間と自由』と言われるものですが、当時の精神物理学、生理学と精神物理学を念頭においたものです。

実は精神に関する自然科学的な研究が進めば進むほど、それに対する反発が起ってきます。19世紀終盤から20世紀初頭にかけて盛んであったスピリチュアリズム、心霊主義、超心理学的研究が流行るわけですが、私から言わせると福来さんというのは、その現れの一つであったと思います。心霊主義、心に関する心理学的研究が、科学的な研究が始まっていた時になぜ出てきたのか。私の考え方ですが、心の研究は実験室、実験設備の整備が始まることによって、このままいくと心の研究が体系化してしまうのでないかと考える人たちがいて、科学に基づいて作業を始めることに、その事実に対する反発する。100%、人間の心、人間の精神はわかるのだという問いを立てる人が出てくる。その問題設定、普通の感覚器官については心霊主義の人たちでもついていける。だが、ベルグソンもそうですが、本当に「全部が」わかるのかと問われると、それはどうだろうか、となるわけです。心理学が心の科学的研究をシステム化し始めた時、まさにそれに対する反発、根源的な問い掛けとして心霊主義が出てくる。福来は元良の弟子であるが、まさに周りが精神的なことを科学的に研究するからこそ、それに対する反発が、当然ながら問題設定として出てくるわけで、福来さんのような方が実験心理学のはじめの頃に出てくることは必然的なものではないかと考えるわけです。では、ベルグソンはどう考えたか。ベルグソンもまた100%、心が科学的に解明できるとは考えられない、と判断し、その判断に基づいた仕事をしたということです。

西川 引き続き大山先生からお話をいただきたいと思います。

大山 前回、東京大学で私が大会委員長となり日本心理学会第51回大会を開催した時が1987年で、その年は元良先生が最初に講義をされてから足掛け100年でした。今回の大会は精神物理学実験室ができて丸100年記念です。日本の精神物理学の講義が始まり、実験室ができた。その間、15年です。記録(文科大学申報)では1888年、帝国大学文科大学で「精神物理学」開講(元良)試験(当時はexperimentの訳)として現在の用語でいう感覚弁別、反応時間、観念連合などがあげられています。心理学史上では、その前年にWundtの「生理心理学綱要」の第3版が出ている。またやはり前年にHallがAmerican Journal of Psychologyの第1巻に元

後、松本は自分の研究テーマにしていきます。元良の「神経ノ伝達作用ニ関スル研究」が1902年に発表されています。1898～99年にかけてヨーロッパとアメリカに留学中の松本に東大心理学実験機器購入のための資金2,500円が送金されています。実験室の建物が5,000円ですから、その半分の金額です。当時、大学卒の初任給が50円です。今で言うと千数百万円が、これらの機械に使われます。そして実験室ができます。これはあくまで「精神物理学実験室」です。それを松本は「心理学実験場」と呼んでいます。これが一つ問題点です。正式には「精神物理学実験室」ですが、松本は同じ年に「心理学実験場」という紹介記事を哲学雑誌に書いています。1904年、松本・元良「片仮名平仮名読ミ書キノ難易ニ関スル実験報告」が国語調査会から出ました。1905年、TitchenerのExperimental Psychologyが出版されました。1906年、京都帝国大学心理学研究室設立で松本が教授に就任します。1908年、増田惟茂が「意思作用の比較心理学的研究」を動物実験で発表しております。大事なことは、この間に日清・日露戦争があった。莫大な国費がいった時ですが、その間に政府は心理学のためにこれだけのお金を出しているわけです。

初期の実験室には視覚室、聴覚室があり、時間研究は後で二つに分けられています。19世紀の終わりは国際的に「精神時間測定」の時代と言われていました。それはある面で言うと行動研究です。当時は動作研究と言っていたと思います。東大の最初の実験室の2室は知覚で、2室は行動研究とバランスがとれています。細工部屋と呼ばれた工作室もありました。

これは佐藤達哉さんと一緒に調べた備品と経費の経年的変化のグラフですが、ここにピークがある。1901年、お金が急激に出ています。ヨーロッパやエール大学の工作室から機械を購入した。1903年、建物が建ったのですから、すでにその時、機械は到着していたわけです。その一つが今回のプログラムの表紙になっているHippのChronoscopeです。Thomas Schravenという現在のドイツの古典的計時器研究の専門家にこの写真を送って調べてもらったところ確かにZimmermann社がつくったもので、四角いガラスの箱になっているものです。本大会プログラムの解説にあるように日本製ではありません。世界に数個あるくらいの貴重なものです。当時の購入価格が130円ですから初任給の2倍以上するものでした。二つ目の機械の追加部分は時間を延長するために特別な歯車になっています。

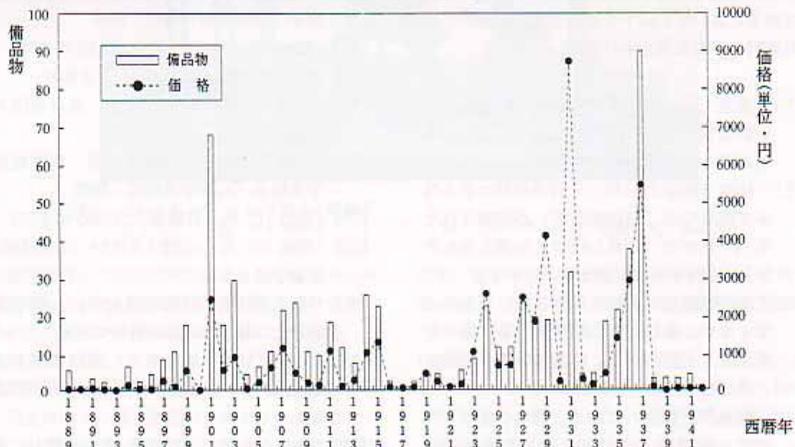


図2 備品数と価格の経年的変化 (1889 ~ 1942)

- 292 -

図 備品と経費の経年的変化

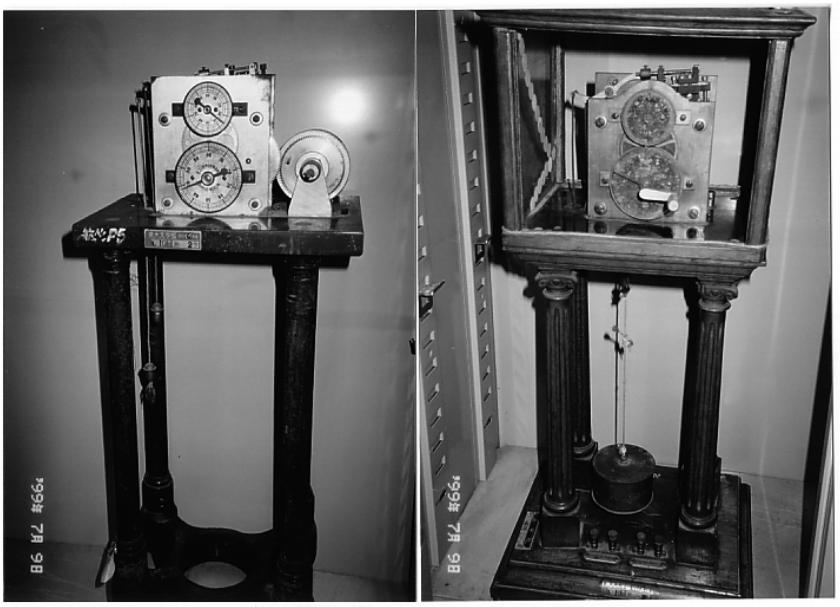
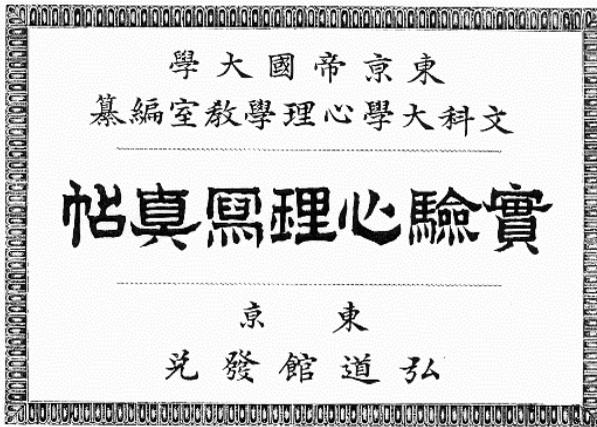


図 Hipp の Chronoscope

東京帝国大学心理学教室編 『実験心理写真帖』が1910年に出ています。写真帖に取り上げられた実験テーマの多くは Titchener のものと共通していますが、行動面や注意の研究では Titchener を凌いでいると思います。苧坂直行さんがこれを複製されて『心理学評論』に再録していますが、これを見ても諸外国に比べても日本の実験心理学は早く確立したのではないかと考えています。



東大心理学研究室(編)『実験心理写真帖』発行 (1910)

図 実験心理写真帖の表紙

西川 指定討論者として最後になりますが、辻先生に討論をお願いします。

辻 このシンポジウムの企画の趣旨は、東京帝大を一つの事例として実験室の設立がもつ学識的な意味を問うことであろう、と思います。私は、関連課題の科研代表者として、学史問題には常に関心もち続けてまいりました。その意味でも、今日3名の話者のお話を大変興味深く感じました。それを踏まえて、感想めいたことを若干申し上げたいと思います。

第一に、実験室の設立は、そこで意図されていた研究内容を具体的に表現すると同時に、その時期の種々の制約の下で後々の研究動向を規定することにもなったと

思われます。だとすると、当時、制約条件と考えられていたものはいったい何であるか、そして、それが後の「東大心理学」の学風形成にどう影響したのか。東大を学史研究の一事例としてみた場合、興味深く感じるのです。本日のシンポジウムで、その回答の一部がサトウ氏の話提供にあったように思います。

第二は、東大やその他の大学における研究の展開をフォローして学範（ディシプリン）が形成される過程を明確に浮かび上がらせるには、この上に何が必要なのかということです。それはすなわち、他の学問分野との交渉やそれが心理学に及ぼした影響をどう捉えればいいのかという問題だと思います。そのような観点からの資料収集とその分析が従来ややもすると見過ごされていたのではないのでしょうか。

第三は、学史問題を総合的に捉えようとするときの「切り口」の問題で、ここでは四つ挙げてみたいと思います。一つ目は、個人の研究生生活史すなわち「アカデミック・ライフヒストリー」を扱うもので、この切り口では、さきほど大山・西川・高砂の諸氏から精力的な資料収集活動によって明らかにされた事実のご説明がありました。この種の学史研究にはパーソナル・コネクションが援けになると思われますので、史資料をできるだけ早急に収集しデータベース化しておく必要があります。

二つ目は、それぞれの時代に心理学の研究・教育においてどういうことが重視されてきたかという問題です。肥田野先生がその点にふれられましたが、お話の中で、研究・教育上の重点課題に時代状況が反映していることを読みとることができると思います。

三つ目は、機器や技法の開発・改良を通して学史に迫るというものです。さきほど肥田野・大山両先生がお話になった成果のほか、京大の保存資料について苧阪直行氏（京都大学文学研究科）が出された著書や、私たちが科研でまとめた報告書がこの視点からの学史研究に相当します。

四つ目は、専門教育のカリキュラム編成や授業内容の変遷を通してみるものです。東北帝大で行われた授業科目について畑山俊輝氏（東北大学文学研究科）がまとめておられるもの、東京帝大と京城帝大時代の実習関係資料の発掘・整理をなさったサトウタツヤ氏の論文などがあります。

いずれにせよ、これらの切り口で得られた成果をどのように総合して心理学の発展過程を復元するかということが学史研究の課題であろうと思います。その段階で

は、例えば国際的な学史比較によって、個別性を超えた心理学展開の姿が見えてくるものと期待できます。私自身が思い描いているのは、ほかならぬそのような全体像としての心理学史であり、近年の我が国における学史研究への関心の高まりをみるにつけ、その目標達成は決して困難ではないように思われます。

今日、心理学では多岐にわたる下位領域間の交流や連携が必ずしも緊密だとはいえない状況にありますが、こういう時期だからこそ、現代心理学の系譜をトレースバックして、諸領域の相互関係を捉えなおす上で、学史へのアプローチが果たす役割はとりわけ大きいのではないかと考えています。心理学教育の面についても、既成の知見の伝達に主眼が置かれ、それが生み出されてきたプロセスが示されないために、教育的なインパクトが弱まっているように見受けられます。その点でも学史を取り上げる意義はすくなくないと思います。

学史はまさに学問の発生を扱うのですが、発生研究に「比較」という手法が有効であることは改めて強調するまでもないでしょう。いま、どんな比較が学史研究に求められるのか、そのことも考えてみる必要があるのではないかと思います。このシンポジウムでの話題提供を伺っていて、以上のようなことを考えた次第です。

そのほか、諸資料の保存など「心理学アーカイヴス」の整備も緊急の課題です。個々の大学に博物館が設置されつつありますが、それらはごく小規模のものにとどまっていますので、学界としてその種の事業を真剣に考えていかなければならないと思います。日本心理学会でも早期にこの件について検討を始めたいと考えているところです。

時間が限られていますので、このあたりで終えたいと思います。

西川 ありがとうございます。当初、提言に申しあげました点につきましても、今後、お考えいただければ幸いに存じます。この場でフロアからご発言を頂戴したいと思います。コメント、質問、何でも結構でございますが。

では、発言のご用意をいただく間を借りて、司会者より発言です。

いくつかお話いただいた中で、精神物理学そのものの内容等については議論されてきています。精神物理学をめぐる歴史の変遷、なかでもフェヒナー問題として、数理心理学者の間で多くの議論がありました。その例を、1972年の東京での国際心

理学会でも大きなテーマになっていたことを指摘できると思います。その後の新たな展開については、すでにご承知かと思います。

ところで肥田野先生に、なぜ「精神物理学(実験場)」という名称の研究室になったのかということについてお伺いしたいと思います。

肥田野 日本人教師としては外山正一が最初に心理学という講義を始めた。それに対して随意科(選択科目)として、精神物理学を元良に講義させた。外山はもともと実験的なことに関心があった。自分で実際にやったことはないと思いますが、元良が持ち帰った新知識を評価したのではないか。元良は教授になってからは心理学の講義をしておりますが、精神物理学の実験も続けている。松本が帰国してからは彼に精神物理学の実験を担当させている。精神物理学というトレードマークは従来の思弁的な心理学とは違う実証的な科学であることを強調したかったのではないか。

西川 精神物理学実験室というのを、心理学実験室と松本が呼んだということについて、大山先生いかがですか。

大山 二つ問題点があると思います。「心理学」という題目の講義が別にありながら、最初の元良の講義の題目を「精神物理学」とした。当時はまだサイコロジーの定訳がなかった。「心理学」というのはもっと古い、mental philosophy に近かった。今日いう教養科目として文科大学の他学科の学生たちも、その「心理学」の講義を聴いていたと思います。精神物理学という元良の講義は(広義の)哲学科の専門講義だったと思う。もう一つは、1903年にできた「精神物理学実験室」を松本は「心理学実験場」と呼び、大正時代になって自分が主任教授となると看板を取り替えさせたようです。かつて結城錦一先生が「その頃(昭和初年)はまだ精神物理学実験室という看板がしまつてあったよ」と言っておられました。それは念写問題と若干関係があるのではないかと思います。精神という言葉は割りに意味が広い。福来に対して元良は念写の現象を研究することは認めていた。そのへんに「精神」と「心理学」との違いがあったのではないかと思います。ドイツ語の Seele と Geist、英語の Soul と Mind の違いに相当するかもしれない。今も精神物理学という言葉が古

めかしいので心理物理学と言い換えようとされている方もいますが、私は精神物理学という言葉を守っていきたいと思っています。この点は今後、もっと検討していくべき問題だと思います。

西川 当時の科学は心理学としてスタートを切ったと言いましても、時代の継続性の中でこれまでの背景を踏まえないといけない。西周が、言葉をどう訳出するかということも、今の問題に引き継がれてきていると思います。サトウタツヤさんから。

サトウ 金森先生からもご指摘がありました。福来の問題についてお答えします。学説的には心霊主義をやるようになるのは不自然とまでは言えません。欧米では科学者、哲学者が心霊主義にかなり入れ込んで研究している例もあったからです。また、福来がやったことはあくまでも実験でした。実験という手法で透視を研究していた。だから最初の研究は当時の『哲学雑誌』に載っています。最初から完全に否定されていたわけではなく、先ほど大山先生もお話になったように、研究自体は学問的に認められていたのです。もちろん、公開実験が行われた結果、学者たちから否定されたわけですが、こうした説は透視・念写学説だけではなく、他の学説でも同じことが起きます。ただし多くの場合、学問上、だめだという最終宣告はしません。学界全体の雰囲気としては、そういうことはないだろうという雰囲気になっていくわけです。しかし、そうなったにもかかわらず、福来が自説に固執してしまった、そうした態度にはやはり問題があります。その結果、新興科学として展開しようとしていた、たった3人しかいない心理学の一人が抜けて、影響力を失ったことが、その後の心理学に大きな影響を与えたと思います。これは制度的な問題だと思います。福来はウィリアム・ジェームスの影響を受けていました。ジェームス自身も心霊協会の会長などをしていましたが、ミュンスターバーグという後釜をドイツから呼んで来て心理学からは足を洗う体制を作りつつ、自らは哲学者になったわけです。福来は異常心理学、催眠療法を研究して、それはやがて精神療法や精神分析になる流れがあったし、そうすることが望まれていた。それにもかかわらず、自ら取り組んだ透視・念写学説が、結果として認められなかった。しかもそれに固執してしまった。この一連の流れが制度的に大きな問題を引き起こしたのではないかと

いう点がポイントだということを補足させていただきます。

西川 制限時間を越えての議論となりましたが、以上を持ちまして、当シンポジウムを閉じます。お話をいただいた先生方、討論をいただいた先生方、そしてご出席の皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- 肥田野直 1998 わが国の心理学実験室と実験演習——明治中期から昭和初期まで
心理学評論, 41, 307～332
- 金森修 2003 ベルクソン：人は過去の奴隷なのだろうか 東京：日本放送出版協会
- 金森修 2004 科学的思考の考古学 京都：人文書院
- 日本心理学会 75 年史編集委員会 2002 日本心理学会 75 年史。(社団法人)日本心理学会
- 西川泰夫 1995 「心理学」、学名の由来と語源をめぐって：サイコロジーは心理学か 基礎心理学研究, 14, 9-21.
- 西川泰夫 1996 『日本の心理学史』保存への問題提起——今あるような心理学はなぜそのようにあるのか. 科学基礎論研究, 24, 23～29
- 西川泰夫 1998 「心理学」という学名の起源—メンタル・フィロソフィーかサイコロジーか— 科学基礎論研究, 25, 17-22.
- 西川泰夫 1999 実験心理学における歴史的心理学実験機器をめぐって—大山・佐藤論文へのコメント：アクロン大学アメリカ心理学史資料館、ハーバード大学歴史的科学機器コレクションでのレビューならびに見聞記と—心理学徒の回想から—。心理学評論、42, 313-325.
- 西川泰夫 2001 わが国への心理学の受容と定着過程を担った先達たち——外国留学、並びにわが国の教育機関との関わりから 心理学評論, 44, 441～465
- 西川泰夫(研究組織代表) 2001 日本の現代心理学形成にかかわる学問史的検討。平成 10-12 年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書。

- 苧阪直行(編著) 2000 実験心理学の誕生と展開：実験機器と史料からたどる日本心理学史 京都：京都大学学術出版会
- 大山正 1998 わが国における実験心理学の成立に対する元良・松本両教授の偉大な貢献——苧阪・肥田野両論文を読んで 心理学評論, 41, 359-364
- 大山正(編著) 1998 心理学史 東京：放送大学教育振興会
- 大山正 2001 わが国における精神物理学の導入——元良勇次郎の「精神物理学」をめぐって 心理学評論, 44, 422-432
- 大山正・佐藤達哉 1999 東京大学における心理学古典実験機器について——備品台帳を手がかりとして 心理学評論, 42, 289-312.
- Oyama, T., Sato, T., & Suzuki, Y. 2002 Shaping of scientific psychology in Japan. *International Journal of Psychology*, 36, 396-406.
- 佐藤達哉 2002 日本における心理学の受容と展開 京都：北大路書房
- 佐藤達哉, 溝口元(編著) 1997 通史 日本の心理学 京都：北大路書房
- サトウタツヤ, 高砂美樹 2003 流れを読む心理学史：世界と日本の心理学 東京：有斐閣
- 梅本堯夫, 大山正 1994 心理学史への招待：現代心理学の背景 東京：サイエンス社

なお、本稿の整理にあたっては立命館大学人間科学研究所・荒川歩氏の多大なる協力を得た。記して謝意を表したい(サトウタツヤ記)。